
ご馳走

枝豆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ご馳走

【Nコード】

N6094A

【作者名】

枝豆

【あらすじ】

俺の前にいる人は誰だろうか。人なのか人じゃないかさえ分からない。君はもう獣と化してしまったんだね。

（前書き）

少し、気持ち悪い表現が含まれています。

ああ、楽しい。

グチャグチャと卑猥ともとれる音が鳴り響く。

だが、そんなイロモノではなく、実際はかつて彼女だったモノの内臓を切り刻み、貪り食う音だ。

今、口に含んでいるのは、大腸。

結構、弾力があって、あまり美味とはいえない。

口の中を鉄の味が駆け巡る。

大腸に飽きると、今度は眼球にとりかかる。

口に含むと、案外美味いことに気付く。

昔から魚の目とかは好んで食べていたほうだった。

魚の目よりも大きくて、思わず顔が綻んでしまう。

そのあと次々と脳やらなんやらを食べていると、もう食べるパーツがなくなってきた。

最後のメインディッシュとしてとっておいた心臓をいとおしそうに手にとって、まずはべろりと舐める。

まだ温かい。

無数の血管が綺麗で、うっとりとしてしまう。

まさに俺は今、快樂の絶頂にいた。

心臓に歯を突き立てる。

柔らかくて、俺の歯は、ぐぐつと中に食い込んでいった。

この生臭さがたまらない。

時間をかけてゆっくりと咀嚼した。

残ったのは、血がこびりついた骨のみ。

その血も綺麗に舐めとってから、その辺に転がす。

まだ足りない。

まだ食べたい。

もっと殺したい。

モット、モット、コロシテ クイタイ。
血まみれの姿で裏路地から出ると、綺麗な女が歩いていた。
周りに人はいない。
顔がにやりとゆがむのが自分でも分かった。
そして、俺は女の背後に回って、女の白い首筋に歯をつきたて、
「いただきます」
と言った。

はあ。

お前は本当に恐ろしい人だよ。

「人」？ いやいや「人」じゃないだろ。

既に。

もう手遅れだ。

俺はただ黙って女の首筋に歯を立てる君を見つめることしか出来ないよ。

君は変わってしまった。

いつかは誰かまわす食らうようになるだろう。

君がふと目を上げて俺を見つめた。

喉仏が引くついたのが分かった。

「もう行こう」

俺はそれだけ言うと人ではなくなってしまった友を・・・
更に暗い道へと誘い込んだ。

獣の這う路地は今日も血の臭いがした・・・。

（後書き）

二回目のホラーです。

読んでくれたかた有難うございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6094a/>

ご馳走

2011年1月16日06時52分発行